

<b>石橋高等学校</b>			
地域連携教員	山崎 浩之 教諭	地域連携教員歴	1年

### 1 コーディネーターについて

石橋高等学校では、部活動、委員会、生徒会活動等を通して、生徒が地域で様々なボランティア活動を行っている。地域の窓口は活動ごとに異なっており、それぞれの窓口がコーディネーターの役割を担っている。

### 2 コーディネーターとの連携の実際

#### ○音読CDのボランティア

音読CDボランティアは、高等学校が所在する下野市ではなく、他市で活動している。活動場所がある市から通学している生徒からボランティアの情報を聞き、教員がボランティアを取りまとめている図書館関係連絡協議会に連絡して朗読ボランティア団体につながり、活動できることとなった。活動では、視覚障害者への音声による市の広報紙等の情報提供を行う際の基礎を学んだり、デイジー図書と呼ばれる視覚障害者向けデジタル録音図書を体験したりすることができ、生徒にとって日常生活ではなかなか体験できないことを体験できる機会となっている。このように、石橋高等学校へは下野市外から通学している生徒も多く、ボランティアに関する広域の情報を生徒から収集することもある。

#### ○部活動単位での連携

野球部が行っている地域連携活動の一つに、学童野球の子どもたちを対象とした野球教室がある。野球部保護者会の元会長が下野市の野球審判部に所属していることから、その方がコーディネーターとなり、市内の学童野球チームに声をかけ、参加者を募集してくれている。教員は、市内の各学童野球チームを知っている訳ではない。コーディネーターがいることにより、市内の全チームに情報が届き、たくさん子どもたちが教室に参加してくれている。

また、野球教室の開催と併せて、自治医科大学附属病院の医師が、子どもたちの野球肘の検査と保護者への野球肘防止のための講話をしてくれている。これは、野球肘の調査をしていた医師のニーズと学校の地域連携活動のニーズが合致したことから実現した活動である。

### 3 成果と課題

#### ○成果

教員は、学校の所在する市や町の出身者ではないことも多く、地域の情報を集めることはなかなか難しい。地元の方がコーディネーターとして活躍してくれることで、地域の知らない情報や活動をまとめて知ることができるとともに、活動の際は円滑に連絡調整してもらえる。

#### ○課題

活動によっては、活動状況や人数調整等について、コーディネーターが間に入ることで相手側に連絡がうまく伝わらず、行き違いが生じてしまうことがあった。また、学校、地域のどちらか一方だけが活動の準備や運営をするのではなく、学校と地域が対等な関係で活動に関われるよう、コーディネーターを通じてどのように地域に働きかけたらよいか課題である。

## 4 その他

### ○地域連携教員として力を入れていること

地域連携活動では学校での教育活動だけでは学べないことが学べ、参加した生徒は活動後に満足感や達成感を得ている。教育的効果のある活動だと感じるが、学校行事や部活動でも生徒は忙しく、連携活動を取り入れながら教育的効果を上げていくにはどのようにすればよいのかと考えた。そこで、新しい取組として、部活動を活用した近隣中学校との連携事業を始めた。地域連携活動のために新しい体制を立ち上げたり、生徒に参加を呼びかけたりすると、教員の負担感が大きくなる、関心の高い生徒しか活動に参加しなくなるという課題が出てくる。今ある既存の組織・体制を生かし、無理なく活動を始めることは、活動を充実させる上で大切なことである。また、中学校にも地域連携教員が設置されており、近くの学校同士で地域連携教員の連携を図ることも大切である。そこで、市内にある4つの中学校に働きかけ、合同練習・練習試合の実施、学校祭への参加・協力、合同発表会の開催等といった各部活動を通した連携活動ができないかと考えた。部活動には、既存の組織を活用できる、ボランティアに興味・関心のない生徒にも参加を呼びかけられる、多くの教員が地域連携活動に関わるといった利点がある。地域連携教員が中心となり、中学校と高等学校が部活動を通して連携できる体制整備を始めたところである。



部活動を通した連携活動（陸上部）